

大豆と小麦と塩水が お醤油になるまで

No. 10

お醤油を仕込んで1年と1ヶ月の報告です。

つい最近まで爽やかだったのに、いつからか湿度が上がってきましたね。この湿度のせい、ちょっと香りが微妙に…変わってきた気がします。(良いことなのか、どうなのか…聞くのが怖い)

強制的に楽天的発想をすると「元気でいるってことさ！」と。でも心のどこかで、「元気なのは、麹菌??本当に?もしや、その他の…○×△○◇××!!」ああ!

フヨフヨくんと機嫌よく戦っている場合じゃない!のでは…。

さて、皆さん。「梅雨」と言う単語の話です。「梅雨」と読みますね。しかし「梅雨」とも読みますね? 梅の実が実る頃の雨だから、といますよね?

でも元々は、霪雨…カビが生えてしまって困る、の意味でバイキンの「バイウ」の当て字で「梅雨」になったという説があると聞いてから、何だか、心配で心配で。

心配しすぎると胃に悪いので、また昔話を。

枯れた水田に水が入り、いつの間にかまだ少し頼りない稲が風にそよいでいますね。今はまだ、視覚的に稲の青葉よりも水面の方が広い感じです。

この頃の水田は、見る方向によって稲がきっちり向こうへ真っ直ぐに道を作っていたり、通せんぼをしているみたいに横一列に並んでいるように見えたりして、ちょっとほほえましくて、つい見入ってしまいます。

けれど、不思議なことにある角度で水田を見降ろすと、稲の可愛い青葉は、全く存在感を無くし水田はどこか遠い世界でも映し出すように、別世界に見えることがあるのです。

まあ、タネを明かしてしまえば(そんなたいそうなものではないんですが)周りの風景を水面が映し出し、下が土色なので土の色に近い色は存在感を無くし、そうでない色は異様に映える、というだけのことなのです。

しかしそれが、稲が頼りなく見えるごく短い期間限定である上に、鏡のように全く同じようには映さないところに「不思議感」が満載でしょう? ファンタジーが子どもの頃から大好きな私には、なかなか想像力を掻き立てられる楽しい風景です。映し出されているものによっては、お酒落な映画のワンカットみたいですよ。

子どもの頃。

水田のすぐ横が土手になっているところがありました。その土手から水面を見降ろしながら歩くと、まるで空の上を歩いているような気がしたものでした。

青色がくっきりと映え、白い雲は土の色になじみ水面までの距離が異様に遠く感じるのです。自分の身体がふわりと浮いたような感覚です。

土手をののし歩きながら自分が鳥になった気でのいるのだから、あの頃の想像力は無敵です。

で。皆様、ご想像なさいましたか? 「その通り!」距離感を錯覚している立派な足は、小さな草だか石だかに取られ、土手を転がり落ち田んぼにチャッポン。

幸い(当然)田んぼの中ほどまで転がるわけも無く、端の一行目の稲を教本踏みつけ、本人にはた

